東海古代研究会　　令和五年

# 東海の古代

第275号　2023年7月

会長　：　畑田寿一
編集　：　石田泉城　　投稿先アドレス：toukaikodai@yahoo.co.jp
ＨＰ　：　http://furutashigakutokai.g2.xrea.com/index.htm

## 卑弥呼はどこに居たか

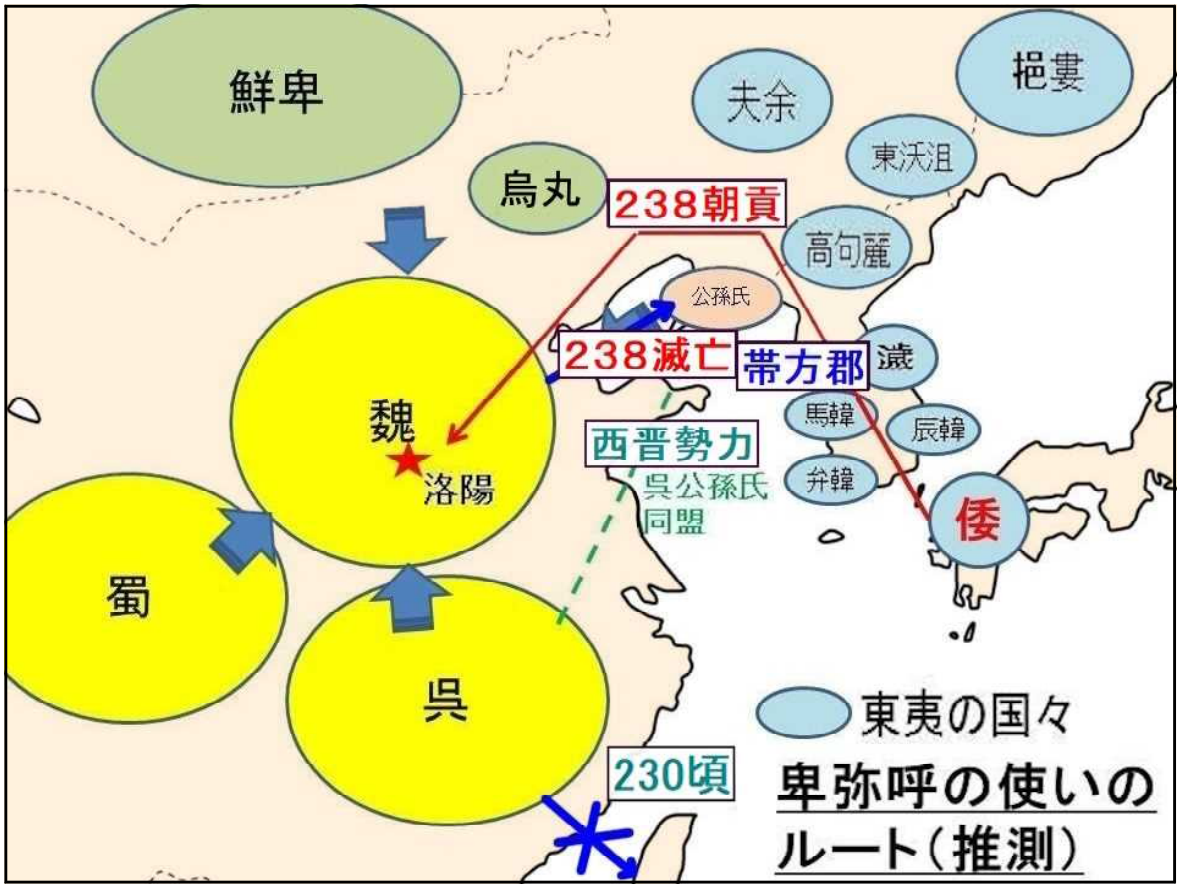
一宮市　畑田 寿一

『日本書紀』や『古事記』に記述が無いが、教科書に記載されている卑弥呼は、歴史上実在した最初の人物として登場する。卑弥呼が生きていた時代は３世紀前半と考えられているが、記述は『魏志』倭人伝など中国の歴史書に限られており、詳しいことは不明なため、昔から諸説があり、現在でも決着をみていない。

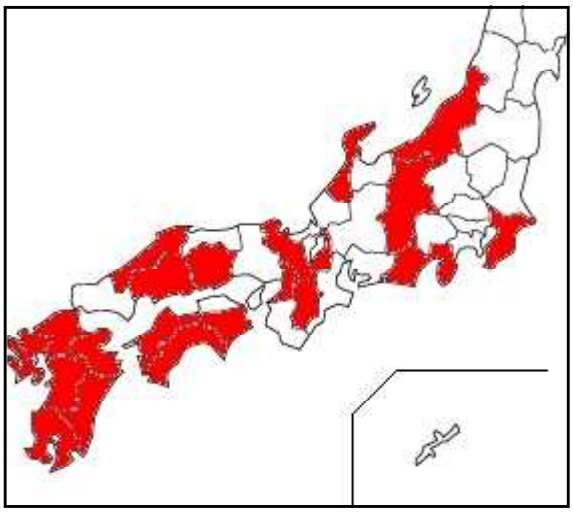
今回は諸説を眺め直して卑弥呼はどこに居たかを考えてみたい。

### １　３世紀前半のアジアの状況

中国大陸では、２世紀に統一国家の漢が滅び、魏・呉・蜀の三国などがお互いに覇を競う分裂国家となっていた。朝鮮半島の一部は、魏や西晋などが支配しており、百済や新羅は未だ存在せず、馬韓、弁韓、辰韓などの国々が日本列島の倭と一緒になって倭人の国を形成していた。



## ２　『魏志』倭人伝が語る女王国



『魏志』倭人伝とは、正しくは中国の歴史書の『三国志』の内の「魏書：第30巻烏丸鮮卑東夷伝の倭人の条」を指し、その中で当時の倭の風習や地理などが次のように書き表されている。

① 倭は当初100か国が存在し、中国と同様乱れていた。しかし、２世紀末頃に卑弥呼を共立した結果、紛争は納まった。

② 卑弥呼は武器を持たず、占いで国々の紛争を解決した。卑弥呼の砦には千名の女性がおり、男性は１名だけで、卑弥呼自体は殆ど外出しなかったが、紛争の解決にあたっての裁定は当を得ており、皆が納得できるものであった。

③ 卑弥呼の指示従わない狗奴国もあったが、これにも柔軟に対応した結果、狗奴国も一定の枠を越えないでいた。

魏の国は、この話をとても信じる事が出来なかった。もし、これが本当ならば我々は毎日何をしているのであろう。しかし、239年、女王からの使いが魏にやって来た。魏は早速女王国と同盟を結び、紛争相手の呉に警告した。**「我が国は東の巨大な国『倭』に鏡100面を授け同盟を結んだ。呉が魏に進軍すれば背後から倭が攻め込むだろう」**

これに対して呉の孫権は倭の南の端と思われていた台湾（夷州）に攻め込んだが、台湾は善戦して呉を撃退した。以降、倭の国は巨大な謎の国と思われるようになった。

## ３　全国の卑弥呼

現在、卑弥呼が居たとする箇所は全国で40か所以上、21都道府県に及んでいる。その中でも毎年ミス卑弥呼を任命して熱心な活動を続けている４箇所を挙げる。

### （１）　滋賀県守山市

24個の銅鐸を産出した大岩山遺跡や大型建物跡が多数発見された伊勢遺跡が存在することから、１～２世紀頃の中心は琵琶湖周辺にあったと考えられるので、卑弥呼もこの地にいたと主張されている。ミス卑弥呼は昨年夏で11代目になった。今年も盛大に次のミス卑弥呼の誕生が期待される。

### （２）　奈良県大和郡山市

現在最も賛同者の多い纒向遺跡に近く、大和郡山市の北西部の矢田地区に邪馬台国があったとする説もあることから、毎年３名のミス卑弥呼を選出してPRに努めており、今年度は41代目のミス卑弥呼が誕生した。

### （３）　大分県宇佐市

宇佐市も負けていない。邪馬台国は豊の国にあり、神武天皇の東遷や天照大神の伝説も全て豊の国が起点と成っているとする説をもとに、卑弥呼の墓の存在を主張されている。ミスの方々もミス卑弥呼、ミス壱与、大神社女と多彩で地元のPRに余念がない。

### （４）　福岡県朝倉市

九州王朝説を唱える皆さんから支持を受けている場所でもあり、地元の熱心な歴史家の指導の許、ミス卑弥呼さん（40代目）も活躍されている。

残念ながら卑弥呼に繋がる遺跡は発掘されていないが、周囲は３世紀頃まで遡る遺跡が散在しており、いつかは卑弥呼の墓が発見されることが期待できる。

以上が熱心な活動を続けている地区の状況であるが、卑弥呼の存在の可能性を主張する

箇所としては、巨大な鏡が出土した平原遺跡（糸島市）、弥生時代の大集落が存在した吉野ヶ里遺跡（佐賀県神埼市）も女王の存在が濃厚なことから地元の皆さんは有力候補地として名乗りを上げている。

## ４　卑弥呼がいたとする説についての疑問点

卑弥呼がいた場所については『魏志』倭人伝の解釈論議を含めて過去に幾多の説が述べられている。それらをまとめると次のような問題点が浮き彫りになる。

### （１）短里と長里

魏の時代、1里は400ｍ程度であった。しかし、過去には70ｍ程度の短里を使った時代があり、この短里で魏志倭人伝が記述されているとする説が存在する。

対馬と壱岐の距離は80Km程度であるが、これを千里余と記述している点からみても、数値が距離を表していれば妥当な解釈と言える。しかし、通説では短里の存在を認めていない。

### （２）南と東の方向間違い

1里400ｍ説を採る場合、九州では海の彼方に邪馬台国が存在することになる。この為、通説では邪馬台国の方位の記述を南と東を間違えたとし、九州から400Km離れたヤマトの地を邪馬台国と考えてきた。なぜ、1万２千里が400Kmになり、最後だけ方向を間違えるのであろうか。

### （３）貰った鏡

卑弥呼が貰った鏡はヤマト地方に多く出土する三角縁神獣鏡と考えられている。しかし、この鏡は既500面以上出土しており、出土していないものを加えると数千面に及ぶと思われる。複製が横行するのは本物の証しとする説もあるが、疑問が残る。

## ５　卑弥呼の居場所の条件

卑弥呼が居たとするには、次の条件を満足する必要がある。

### （１）　卑弥呼は少なくとも邪馬台国近くに住んでいた。

最近は、卑弥呼は邪馬台国と別な地に居たとする説が多いが、少なくとも戸数７万戸の最大国の邪馬台国の近くに住んでいた。卑弥呼だけが400Ｋｍ以上離れたヤマトに居たとする説は見直しが必要であろう。

### （２）　卑弥呼の墓には立派な鏡が埋葬されている。

卑弥呼が貰ったのは粗悪な三角縁神獣鏡ではなく、もっと立派な鏡を貰ったとする説もある。いずれにしても国交樹立に相応しい品の登場が待たれる。

### （３）　難升米など魏に使いに行った者が近くにいる。

難升米などは倭国の代表として数回魏の使者と会合を持っている。卑弥呼の身近にいる必要があるのではないか。また、倭の外交窓口の伊都国などは北九州にあり、九州との連絡が可能な範囲であることが必須条件であろう。

### （４）　最後に戦争状態となった狗奴国が近くにある。

狗奴国との戦闘の詳細は語られていないが、247年に魏の使者が難升米に魏の軍旗を届けるなど、支援の手を差し伸べてきた。邪馬台国と狗奴国は近くにあったと考えられる。

### （５）　百名近くの陪塚が存在する。

247年頃卑弥呼は死去した。魏志倭人伝には「卑弥呼以死 大作冢 徑百餘歩 殉葬者奴婢百餘人」と記されている。墓の大きさにも緒論があるが、百余名を葬った墓が付近に無ければならない。この点では現在の比定地は全て条件をクリアできていない。

卑弥呼の居場所を考える時。朝鮮半島からの距離や奴国からの距離を中心に考えれば、九州地区が有力になる。しかし、有力な遺跡が存在しない。一方、ヤマトは箸墓古墳という有力な候補があり、多くの研究者の賛同を得ている。

しかし、３世紀頃の大型建物を有する遺跡は今や各地に多数あり、大型建物を卑弥呼の宮殿に結びつけることは出来ない。

決局、現在の処、決め手に欠く状態にあり、状況を打破する品物の出土が待たれる。

# 卑弥呼の痕跡

名古屋市　石田 泉城

## 1　『魏志』倭人伝とは

卑弥呼のことが記された古文書は、『三國志』を始めとして、『北史』や『梁書』など中国大陸にあった古代の王朝を記した歴史書のいくつかにあります。

一方、日本の古文書『古事記』や日本の正史である『日本書紀』には卑弥呼の名は出てきません。したがって、卑弥呼については『三國志』等をもとに論じることになります。

『三國志』は、西暦180年頃から280年頃までの100年間における魏・呉・蜀三国の闘いを描いています。その著者は、三国時代の同時代を生きた陳寿（ちんじゅ、233年～297年）であり、もともと蜀（221年～263年）の官僚でしたが、後に呉を滅ぼし、魏から禅譲され三国を統一をした西晋（265年～316年）の官僚になった人物です。

この『三國志』の中で、魏の部分だけを取り出して『魏志』ともいいます。その『魏志』の烏丸鮮卑東夷伝に当時の日本人である「倭人」のことが記されていますので、この倭人のことが書かれた部分だけを、さらに取り出して『魏志』倭人伝と呼んでいます。そこに卑弥呼が登場します。

『魏志』倭人伝（以下倭人伝と記します）の記述は、信憑性の低い史料を排除し簡潔に記述されているので、当時の知識人にはたぶん理解しやすく、また漢字を使いこなしている現代の日本人にもわかりやすい内容です。

## 2　邪馬壹國（女王國）の場所

さて、その倭人伝には、当時の魏は、倭人の国である30カ国と交流しているとされ、その30カ国の国名が記されています。その中で代表となる国は、女王が都とする「邪馬壹國」（やまいちこく）と記され「邪馬壹國」は「女王國」であるとも記されています。この「邪馬壹國」は、通常は「邪馬台国」（やまたいこく）と読み慣わされています。

２～３世紀の当時、朝鮮半島にはソウルの辺りに、魏や西晋の出先機関である帯方郡があり、その帯方郡から女王國までの距離を倭人伝では１万２千余里と記されています。

帯方郡から朝鮮半島南端まで７千余里、朝鮮半島南端から九州の北端までが３千余里と記されていますので、合計で１万余里です。女王國までの全行程１万２千余里からこれを差し引いた残りの２千余里が九州に上陸してから女王國までのおよその距離になります。

その残る行程の２千余里は、対馬海峡の横断距離が３千余里ですから、その距離の３分の２となります。これを上陸地点の末盧國を松浦半島（呼子港）として、図示すれば、女王國の場所が特定できます。図示したとおり女王國は北部九州の範囲にあります。

末盧國の上陸地点が多少ずれたとしても、女王國は北部九州のおよそ図示した範囲にあります。ただ、実際に魏の使者が女王國に行く行路は、対海國や一大國における移動距離がありますし、また末盧國からの行程も直線ではありませんので、女王國（の中心）は、直線距離の２千余里よりもさらに内側に位置すると理解する必要があります。

## ３　邪馬台国論争は不要だった

「自（帯方）郡至女王國、萬二千餘里」（帯方郡より女王國に至るまで１万２千余里）の記述のように、女王國は魏の出先機関である帯方郡を起点とする行程です。ですから、「南至投馬國、水行二十日」の投馬國の起点も同様に帯方郡と考えねばならないでしょう。つまり、古代史の学者が冷静沈着であれば、投馬國の起点は帯方郡ですから近畿説は始めから生まれなかったと思います。

このことから私たちはたいへん重要なことを学びます。

つまり、大枠を抑えた上で、それを前提にして考察しないと、誤った方へ結論が進んでしまうという戒めです。大枠がまず大切であり、その大枠の中で考えれば、女王國は北部九州にあると私は思います。

つまり、卑弥呼は何処にいたかといえば北部九州に居たということになります。

以上、卑弥呼の所在について一通り説明しましたので、主要な話はこれにて終わりということになりますが、ただ、これに伴い疑問があると思います。

## ４　邪馬台国近畿説はなぜ生まれたのか

１つ目の疑問は邪馬台国近畿説についてです。

倭人伝には、先述のとおり帯方郡から女王國までの距離が１万２千余里と明記されていますので、私は、近畿説は論外だと思っています。このように言いますと、必ず、九州説に対して、近畿説もあるのではないかと疑問を抱かれると思います。

近畿説は、この１万２千余里の記述を無視します。そして「南至投馬國、水行二十日」の記述の投馬國への起点を不彌國（博多あたり）と想定して、その不彌國から南に投馬國があり、その投馬國からさらに南に女王國があると解釈します。投馬國からさらに南に女王國があるとすると九州を通り越して太平洋に女王國があることになってしまい近畿には行きつきません。そこで、女王國は近畿にあるという前提の上で、倭人伝にある「南」と記される方角は、間違いで、きっと「東」に違いないとして、近畿の方向へ持って行こうと無理矢理に改変し解釈したのが近畿説です。しかし、このように元の記録を自説に都合がいいように改変して解釈しては、事実の追求はできません。巨大な前方後円墳が近畿にあるから､女王國はヤマトにあるに違いないという思い込みがそうさせたものと思います。

女王國は、倭人伝に記されているのですから、倭人伝の記述に忠実に基づかない近畿説は成立しません。

## ５　近畿には国がなかったのか

では、倭人伝の時代に、近畿には国がなかったのかと疑問を抱かれる方もいると思います。近畿には国がありました。近畿を中心として前方後円墳という特異な形をした大きな古墳がありますので、当然近畿にも大きな国があったのは間違いありません。

ここで日本列島の周辺の状況を広く見る眼が必要です。

３世紀の中国大陸には、魏・呉・蜀などの国々が並立し、朝鮮半島にもいくつかの国々がありましたから、日本列島にもいくつかの国があったとしても不思議ではありません。

事実、倭人伝には、魏と交流する倭人の国は、30カ国あったと記されていますし、魏との交流がなかった狗奴國についても記されていますので、遺跡の状況も合わせて理解すれば近畿にも国があったことは間違いないでしょう。

ただ、『三國志』には、近畿の国々と魏との交流については記されていません。

『三國志』の構成では、魏については本紀と烏丸鮮卑東夷伝などの列伝があるものの、呉や蜀には列伝がないため、呉や蜀が周辺の国々とどのような交流があったのか、わかりませんが、魏が倭と交流があったのと同様に、呉や蜀も周辺の国々と何らかの交流があったと推測されます。近畿は呉や蜀と交流があったのかもしれません。

## ６　なぜ卑弥呼を祀る神社はないのか

３つ目の疑問は、卑弥呼を祀る神社がないとされることです。

確かに卑弥呼を祀る神社は現存しません。ただし、卑弥呼を御祭神とする神社がないからといって、卑弥呼が存在しなかったというのは短絡的です。

（近年になって鹿児島県霧島市に卑弥呼神社が建立されましたが紛らわしいことはしないほうがよろしいですね。）

日本の美術史家・歴史家である田中英道は、『邪馬台国は存在しなかった』（勉誠選書、2018年）で記したように、卑弥呼を祀る神社が存在しないのは、卑弥呼が『三国志』の編纂者である陳寿の捏造だからだとします。この田中英道の捏造説は、背景や根拠がまったく示されていませんし、神社の御祭神の変遷状況を踏まえていないので納得できかねます。

そもそも神社の御祭神は、時代によって書き換えられています。

神社というと、鎮守の森があり代々変わらずにずっと不変であったかのように思われますが、仏教伝来の時期のあとには「神仏習合」（神仏混淆）がなされ、また明治時代には、大きな変革があって、明治初期の「神仏分離令」や明治末期の「神社合祀」政策により、御祭神の書き換えや、神社の移転や消滅もありました。

たとえば、御祭神書き換えの有名な例として、江戸時代に数多くあった牛頭天王を祀る天王社があります。明治維新後にはほとんど津島神社や八坂神社と改称され、祭神も素戔嗚尊に改められています。

愛知県津島市にある津島神社は、東海地方を中心に全国に約３千社ある津島神社・天王社の総本社とされ、由緒書きには、“津島神社は古くは津島牛頭天王社と申し今日もなお一般に「お天王さま」と尊称されております。”とあります。神仏習合からずっと牛頭天王を祀っていたものの、現在の御祭神は、主神が建速須佐之男命（たけはやすさのおのみこと）で、相殿が大穴牟遅命（おおあなむちのみこと、大国主命）になっています。御祭神であった牛頭天王は、『日本書紀』に登場する神の名に変えられているのです。

これに習えば、卑弥呼は『日本書紀』に登場しないため、ほかの神様に置き換えられた可能性がたいへん高いと言えます。どの神様に置き換えられたかと言えば、『日本書紀』の編者は、卑弥呼を神功皇后になぞらえていますので、卑弥呼が御祭神だったのを、神功皇后に変えられた可能性があるでしょう。

## ７　卑弥呼は神功皇后か

４つ目の疑問として、卑弥呼は神功皇后ではないのかというご意見もあります。

卑弥呼と神功皇后は、全く別の人格です。

卑弥呼は独身で子は無く、奥宮に籠もり人前に姿を見せない巫女です。一方、神功皇后は、仲哀天皇の皇后、つまり既婚で、後の応神天皇を生みますから子もあります。そして自ら闘いに臨む人物です。したがって、卑弥呼と神功皇后は、まったく別の人格です。それでも、書紀編者が卑弥呼を神功皇后になぞらえたのは、倭人伝の記述に合わせるように工夫したためでしょう。

## ８　卑弥呼は天照大神か

また、５つ目の疑問として卑弥呼は天照大神ではないかとの仮説もあります。

安本美典は『卑弥呼の謎』（講談社、1972年）や『古代九州王朝はなかった』（新人物往来社、1986年）などの著書で、卑弥呼＝天照大神を主張されています。卑弥呼と天照大神は、確かに宗教的な権威という点では似ています。ただ、安本説では第30代敏達から第42代文武までの13代の即位が信用がおけるとして一代を「10.21」年と算出し、これをもとに天照大神まで遡り、天照大神と卑弥呼の時代は同じ頃とされます。しかし、天照大神の時代に近い初代神武から第29代欽明までを計算すれば「39.83」年となります。データのサンプリングを変えて試算すれば、古代天皇の在位年数を一代十年とする安本説は成立しないことは明白です。

むしろ、この試算からすれば、天照大神は卑弥呼よりも相当に古い時代の伝承と推測でき、卑弥呼と天照大神は同時代の人物ではありえないといえます。

ただし、神社の御祭神として、卑彌呼を天照大神に置き換えられて祀られることはあります。卑彌呼は、記紀に登場する天照大神に集約化された場合があるのではないかと思います。

## ９　卑弥呼の墓は箸墓古墳か

６つ目の疑問は、卑弥呼の墓は、箸墓古墳ではないかというご意見もあります。

これはまったく見当違いです。

倭人伝には、卑弥呼の墓は「大作冢、徑百餘歩」と書かれています。「冢」は周囲の地面よりこんもりと丸く盛り上がった場所を指し、「径」は円形のさしわたしを言いますから直径です。したがって、卑弥呼の墓は、直径百歩余りの円形の墳丘、円墳です。

念のため『三國志』から「径」の語句の使われ方について事例をあげると、「徑寸大珠」という記述があります。真珠など円形の大珠の直径を表すときに「径」が使われており、「寸」は、2.4cmですから、直径2.4cmの大粒の真珠や翡翠などの玉をあらわしています。つまり、「径」は円形の直径です。

卑弥呼の墓の場合は、「徑百餘歩」とあり「歩」は24cmですから、百歩余りは、直径30ｍに満たない円墳です。（参考「卑彌呼以死、大作冢、徑百餘歩、狗葬者奴婢百餘人」）

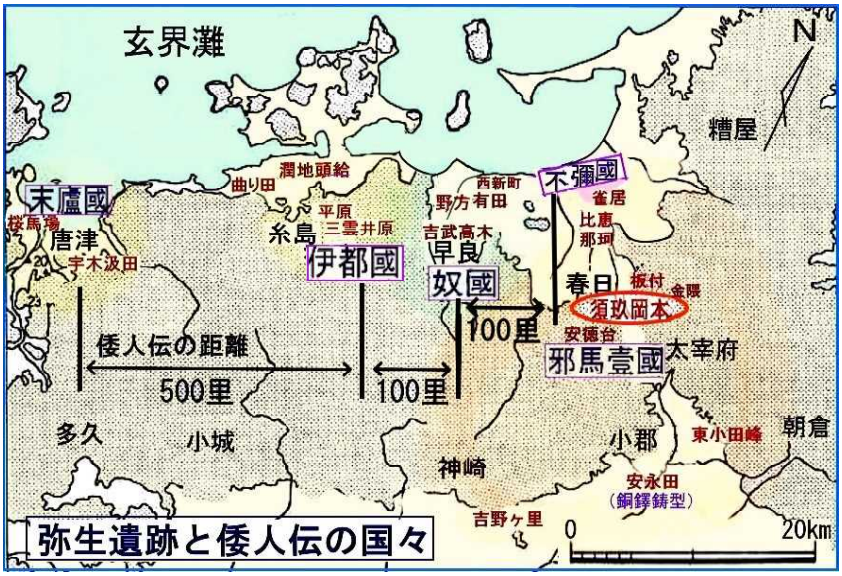
箸墓古墳は前方後円墳であって、まず形状がこの記事と違います。大きさが280ｍもあり規模も違います。さらに箸墓古墳は、墳丘の裾に玄武岩の板石があることから竪穴式石槨があると推測されますので、「棺有れども槨無く」の倭人伝の墓の記述に相反します。したがって、箸墓古墳を卑弥呼の墓とする可能性はゼロです。

現在調査が済んでいる古墳の中で、もっとも卑弥呼の古墳の条件に近い古墳は、福岡県久留米市御井町字高良山に所在する祇園山古墳（ぎおんやまこふん）です。祇園山古墳は、３世紀中頃の築造と推定され、石棺はあるが槨はなく、66の埋葬施設があり、東西約24ｍ、南北約23ｍで、条件に最も合致しますが、ほぼ正方形の方墳ですので卑弥呼の墓ではありません。今話題になっている吉野ヶ里遺跡の石棺墓は、墳丘がありませんので、残念ながら卑弥呼の墓ではありません。ところが、弥生時代中期に築造された吉野ヶ里遺跡の北墳丘墓は、南北に長い小判型でこの北墳丘墓には、頂上から墓穴を掘って14基以上の甕棺が埋納されています。このように北部九州の甕棺墓や箱式石棺墓などは槨がないので、卑弥呼の墓が北部九州にあることを示唆している点で重要です。

## １０　卑弥呼の墓はどこにあるのか

倭人伝の時代の奴國の比定地は、福岡平野が定説となっています。ところが、倭人伝には伊都國から奴國は100余里の位置にあると記されており、通説のように奴國を福岡平野

に位置したとすると、200里以上の距離になってしまい倭人伝の記述と合致しません。伊都國のあった糸島平野から100余里、約８kmの場所は日向峠を挟んだ早良(さわら)平野です。ここには三種の神器を有する吉武高木遺跡があります。




この早良平野には、数百の住居跡を有し箱式石棺墓10基から後漢鏡や玉類が出土する環濠大集落の野方中原遺跡や、墳墓群のある宮の前遺跡、古代水田跡の拾六町ツイジ遺跡など、倭人伝の時代の遺跡がありますので、この早良平野を奴國とするのが妥当です。

とすると、必然的に女王國は、通説で奴國とされている福岡平野にあるということになります。福岡県春日市にある須玖遺跡群が女王國の中心地と考えられ、須玖遺跡群には墓地を始め青銅器等工房や集落など、60ほどの遺跡が密集しています。その須玖遺跡群の須玖岡本遺跡の巨石下甕棺墓は、まさに女王國の中心的な王墓です。

この巨石下甕棺墓は、甕棺内の副葬品はほとんど散逸していますが、剣・鏡・玉の３種の神器が出土し、副葬品には、銅剣・銅矛・銅戈のほか、破鏡の前漢鏡32面以上、瑠璃璧、勾玉、管玉など豊富な副葬品があり強大な王墓と考えられます。移設前の墓の発見地の状況から30m規模の墳丘墓と想定され、郭が無く甕棺墓が直接土葬されていますので、倭人伝の卑弥呼の墓の状況と合致しています。ただ、この墓は卑弥呼の鏡と考えられる後漢鏡ではなく前漢鏡を副葬していることから、卑弥呼の数代前の弥生王墓と思われます。

福岡平野は、宅地化が進んでいるため、残念ながら卑弥呼の墓が現存している可能性は少ないですが、須玖遺跡群の西には、弥生から古墳時代にかけての生活遺構がある弥永原(やながばる)遺跡とともに、日佐原（おさばる）遺跡があります。日佐原遺跡は、福岡女学院の造成により既に削平されており墳墓形状などはわからないものの、箱式石棺墓や甕棺墓など57基が出土し、そのうちの石蓋土壙墓(せきがいどこうぼ)から長宜子孫内行花紋鏡の後漢鏡や翡翠勾玉、管玉、切子玉などが出土しており、卑弥呼の墓を示唆する事例として注目されます。

## 前回の例会の話題

- 蛇行剣の世界　一宮市　畑田寿一
- 四天王寺と難波津、及び前期難波宮　東海市　大島秀雄
- 神武東行の出発地　名古屋市　石田泉城

## 例会の予定

1　日時　**７月１５日(土)**13時半～
2　場所　名古屋市市政資料館

■ 来月以降の例会　原則土曜日
8/20日、9/16、10/21、11/18、11/18

## 会員の投稿について

■ 会報誌への投稿（編集担当：石田）
toukaikodai@yahoo.co.jp
■ 投稿締切り日　７月３１日（月）

## あいちサマーセミナー

タイトル：教科書が教えない！！
真実の古代史
卑弥呼は何処に？
カテゴリー：社会・歴史
ＩＤ：Ｇ１７８
日時：2023年７月16日（日）
３限　13:10～14:30
場所：名古屋大谷高等学校
西館４階　教室２１４
地下鉄桜通線　瑞穂区役所下車
４番出口北西へ徒歩４分
講師：畑田寿一、石田泉城（予定）